

<シリーズ・若者のひろば>

学 ぶ こ と

柏倉美沙

柏倉美沙さんは、今年3月に前橋南高校を卒業。
現在、東京農業大学地域環境科学部森林総合科学科
1年生。1月の「ぐんま教育のつどい」社会科分科会
で、担当の田口有理先生とともに、政経の授業体験を
発言した。

わたしの出た高校は普通科である。ほとんどの授業を教室で受け、先生の説明を聞き、板書を写すという作業の繰り返しで三年間が終わる。この授業スタイルは、大学入試を乗り切るためには一番効率の良いものかもしれない。だが、わたしたち高校生が勉強する意味は、大学進学のためだけなのだろうか。

わたしたちの最終的な目標は、社会に貢献できるような大人になることである、とわたしは考えている。そのためには、自ら学ぶ姿勢や責任感、積極的に物事に取り組む行動力、コミュニケーション能力が、どんな職業でも必要になってくるはずである。現在のような、教科書にある知識を定着させるだけの授業では、これらの力を鍛えることができない。また、先生任せの、受け身的な姿勢で授業に臨む生徒が増えることで、クラスの勉強する雰囲気はマイナスになる。

確かに、教科書の内容が把握できていなければ将来仕事の専門知識や技術を学ぶ上で支障を来す。よって、現在の授業スタイルを全面的に否定しているわけではない。しかし、その状況を少し改善し、もっと高校生が自ら積極的に疑問点を調べ、友達と意見を言い合う環境や時間も、大切にしていけるべきであるとわたしは考える。

例えば理科の場合だと、小学生の頃は自分で学校の敷地内や公園の植物を探して観察し、スケッチをした。草や花や土の感触、におい、そこにいた虫のことなども、大切な情報としてメモした覚えがある。また、教科書に載っている実験を方法や結果などを暗記するのではなく、実際に班で協力し、やらせてもらえる機会が多かった。実験を行うことで、わたしたちは教科書の文字や写真、グラフを具体的なイメージとして吸収することができた。わたしは理科の実験を通じて、知識を蓄えるだけでなく、班ごとに結果が異なるおもしろさや、目の前で実際に変化が起こった時の驚きなどを経験できた。この感覚は、設備の整った実験室があり、仲間がたくさんいる学校でなければ、味わうことができなかっただろう。

そうは言っても覚えるべき事が山積みで、学習内容も複雑になるのが高校の勉強である。こうした、実際に自分の目で見て手を動かして確かめる、というような授業を多く行うのは、時間的にかなり厳しいものがある。しかし、少なくとも一年に

一回くらいはどの教科でもこのような機会が持てるよう、先生と生徒と一緒に工夫していけたらよいだろう。そうすれば、授業はより豊かになり、高校生は今よりもっと意欲的に学べるようになるだろう。

わたしが高3の時に受けた政経の授業では、班ごとにテーマを決め、新聞記事を基に、政経の問題作りを行った。その後、他の班が作った問題を解き、自分の班の回答解説を発表形式で行った。この授業はいつも問題を解くだけのわたしたちにとって、とても新鮮だった。問題作りをする中で、わたしたちは普段よりも教科書や資料集を積極的に活用し、きちんと解説ができるように進んで勉強した。また、班で協力し、良問を作るために友達と意見を言い合った。そしてなにより、この時間はわたしたち一人ひとりが自ら学び考える、という機会を多く与えてくれた。わたしたちはこの授業を通じて政経に関する勉強だけでなく、社会に出て行くために必要なことも、学ぶことができた。

わたしは4月から東京農業大学に進学する。なぜこの大学を選んだのか。それは、わたしが今まで述べてきた高校の授業に対する思いとおおいに関係がある。

この大学では「実学主義」という教育理念の下、多くの学生がそれぞれの専門分野を勉強している。「実学主義」とは、「自らの感性と体験を通じて『生きる力』を育む」、「実践力を養う学びの場」というもので、この大学の最大の特徴である。似たような勉強ができる大学は他にもあるが、わたしはこの「実学主義」に強く惹かれた。多くの演習や実習を経験できるこの大学で、確かな知識と技術を身につけたい、と思ったのだ。まさに、わたしが求めていた学びの環境が十分に整っている。自分にぴったりの大学だと思った。

大学進学を目指している高校生の皆さんには、自分が本当に学びたいことは何か、どのような環境でそれを学びたいのかを真剣に考え、家族と相談しながら納得のいく進路選びをしてもらいたいと思う。

高校生の3年間は将来を大きく左右する大事な時期だ。いかに多くのことを経験し、吸収することができるかは、自分自身にかかっている。まずは興味のある教科や職業を自分で調べたり、それに関連した本を読んだりするのはどうだろう。授業中、発言する機会があったら、遠慮せずに自分の考えを発表するのもいい。仲間と意見交換をすることで、自分の考えを深めてみよう。そうした小さな一つ一つの行動が、普段の授業をちょっと違う角度からみせてくれるかもしれない。授業に活気が出てくれば、先生方はちゃんとその雰囲気を感じ取ってくれるはずだ。

今すぐに授業スタイルを変えることは不可能だ。だからこそ、わたしたちができることから積極的に行動していくことが、今後のよりよい授業づくりに欠かせないと思う。生徒一人ひとりが、学ぶことの本当の意味を考え、先生方やクラスの仲間と協力して、充実した授業づくりを目指してほしいと思う。 (2010年3月、記)